

伊勢神宮は日本と世界の守りの宮

乙姫様

よもやまばなし

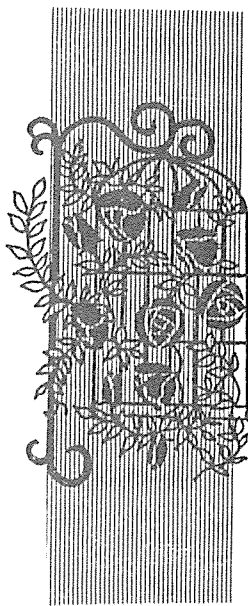
現界霊界神界

森羅万象話



聞きて

聖誌編集室 川見 歓春



——乙姫様、おはようございます。前回は来年の初詣でということですね、おもに那智熊野にかかわるお話を、お聞かせいただきたいのですけれども、今回はさらに北上して、伊勢神宮と神島のことをお話しいただければありがたいのですけれど。

乙姫 とにかく伊勢神宮は母なる神・天照大御神の本地だし、日本と世界の霊的守りだからね、年の始めにお伊勢さんにお参りして、自分と世界の弥栄を祈るのは、とてもたいせつなことです。

——乙姫様には、お参りされるたびに、ご

神示もくだるようですね。

乙姫 まあ、むやみと口外できないのですが、たとえば初詣でしたら、その年のビジョンが啓示されます。サダム・フセインがあげた湾岸戦争はいつだったかしらね。

——ええっとですね、あれはたしか平成二年か三年あたりかと…、ちよっと聖誌の綴じ込みを調べてみます。…あ、平成三年ですね。で、この年に伊勢神宮をはじめ、熊野の那智の滝から神島にまで、龍宮家族で初詣でしているんですね。

乙姫 ああ、あのときは熊野那智までお参りしたんだったね。お前がみんなからはぐれたりして。

——ええっ、そしんなことしてませんよ。

乙姫 そうだったかね。

——ええ、たぶん、いえ、ぜったいしてないとおもうんですけどね、たぶん…（笑い）。

乙姫 たぶん、ぜったいね（笑い）。

——平成三年の初詣ででの伊勢神宮の啓示

——それよりも、あの伊勢神宮初詣でのときの啓示ですけれども。

乙姫 あのととき神前でお祈りしますと、神殿の奥から、神殿といっても神界にある神殿だから、それは宏壮にして清浄なものだけだね、その神殿の奥から神様が緋緘の鎧に身を固められ、白馬に騎られて、西の方へと駆け出して行かれるのを霊眼で拝しました。私は、ああ、戦争が始まるんだな、とさとりました。はたして、それからすぐに湾岸戦争が勃発したのです。

——そのことは、この聖誌の平成三年二月号の巻頭言「世紀末戦争と日本の聖使命」に載っていますので、ちよっと読ませていただきますとですね、

——平成三年二月号の聖誌の巻頭言から

『昨日（一月十六日）、ついに中東戦争が勃発しました。じつは私は昨日の昼、龍宮家族の皆様と伊勢神宮に初詣でいたしました。その時、伊勢の神様が緋おどしのヨロイカブトで武装して、お出まし遊ばされるのを拝しました。私は「ああ、戦争だな」と直観し、皆様に伝えました。その晩、多国籍軍がバグダッドを空襲したのです。私は予言の的中を

誇っているのではありません。それは愚かなことです。私はこの湾岸戦争もまた、二〇世紀末の神界の経綸の一環であるということ、そして伊勢の神様はそのためにこそ、かたじけなくも武装したまい、神軍として出御したもうているのだということ、このことを声を大にして訴えているのでございます。神界の経綸とは、もちろん「みろくの御世」、つまり地上に母神様天照大御神の御心を実現することであることは、たびたび申し上げました。また、それは人類の意識の進化であることも強調してきました」

饗将門の乱と元寇の国難に伊勢から神兵出撃

乙姫 いろいろ重大なことが語られているんだけれども、ここではさしあたり年頭の伊勢神宮では、その年のビジョンが与えられることと、伊勢の神様はいつも日本のために、神界からお守りくださっているということね。——はい、ありがたいことです。緋賊の鎧まで身にまとわれて、まさに白馬の神兵です。ねえ。

乙姫 こういうことは、これまでも再々に

回って、バクダンやショウイダンを落として行くB29を、神風で一蹴してくれるかと。

饗奇跡と災害は待つと来ず、忘れた頃に起る

乙姫 神風も神兵も、総じて奇跡というものは、待っているときは起こりません。奇跡を待つというのは、一つのエゴですから、それは忘れたときに起こりません。イエス様も、それは野盗のようにこっそりとやってくる、と教えておられます。

——はあ、待っていると来てくれないで、忘れているとやってくる。まるで災害みたいです。ねえ。

乙姫 そうです、奇跡と災害は、忘れたころにやってくるのです。

——ほくも阪神大震災で懲りまして、緊急持ち出し用のリュックサックを買って、懐中電灯やら携帯ラジオやら軍手やらカンパンやら詰めこんで、枕許に置いてあるんですけど、待つと来ないことわりか、地震はいつこうに起こってくれず、そうなる。最初は頼もしかったリュックサックも今は邪魔もので、もう片付けてしまおうかとおもっているんです。

わたってあったのです。たとえば平安時代の天慶年間に平将門が叛いたときなんかもう、ある夜、伊勢神宮から大勢の武者たちが馬にまたがって現われて、東国に向けて駆け出していくのを、大勢の住民たちが目撃しているのね。もちろん神宮にはそんな兵士はいないから、あれは伊勢神宮の神兵にちがいないと噂されるようになりました。

——はあ、不思議です。ねえ。

乙姫 幕末明治維新以前で、日本の一番の国難といえば鎌倉時代の元寇だけでも、あのときも伊勢神宮から神兵が出撃して、あれで、元軍との船戦（ふないくさ）の最中に、どこの誰ともわからない軍船が現われたのね。その船には白衣の神官が乗っていて、元軍の軍船のあいだいを縦横無尽にかけめぐりながら、次々と敵を沈めていくのを、これまた大勢の日本の兵士たちが目撃して、伊勢の天照大御神が日本の国難を救うために、神風と神兵を繰り出してくださったと感激したのです。

——ああ、神風もふきましたからねえ。今度の戦争でも、日本人は神風を渴望したのですけれどねえ。わがもの顔で日本の空を飛び

けど、安外、片付けたところに地震がドーンと揺れるのかもしれないね。

饗任せきる心、中今に徹する心が奇跡を呼ぶ

乙姫 神様も忘れた頃にやってくると言っただけ、人がいたけれどね。

——はあ、忘れていけばいいのでしょうか。ほんとかなあ。なんとなく釈然としませんねえ。

乙姫 それは求めて求めて求めた果ての無心の境地であってね、神様なんか忘れた無神論者になればいいって意味じゃありません。

——神様を求めた果ての無心：ですか。むつかしいですね。

乙姫 要するに、天照大御神をお慕いし、天照大御神におまかせして、中今を元気に生き通すことなの。この「まかせきつた心」、この「中今に徹する心」、これが無心なので。そして結果として奇跡を呼ぶことにもなるのです。

——わかりました。

乙姫 それよりも、伊勢神宮のことはどこへいったのよ。

——ああ、すみません、そうでしたそうでした。今年の初詣ででの伊勢神宮の啓示は、たしか優雅なものでしたね。

繆予言に気を取られて足もとを見失うな

乙姫 ええ。神宮の神前でお祈りしていると、御簾がすうっと上がって、女神様が静かにお琴を奏でておられるのを拝しました。それで「ああ、今年は平和なんだなあ」とわかりました。

——実際、そのとおりでしたよね。当たり前です。ええ！

乙姫 また、そんなふうに関心するから、困るのよね。ほら、その巻頭言のここを呼んでみなさい。

——ああ、はいはい。

『さて私は世界のこれからの霊的趨勢について話しました。私が心配するのは、皆様がこれを何か未来への予言のように受け取って、心が「今」から逃げてしまうことなんです。これが予言というものの陥りやすいワナです。いつもいうように、私たちにとって「今」じゃないのです。今を上る空で生きて、未来も

何もありません』

繆伊勢神宮創建の恩人にして聖女・倭姫命

乙姫 だから、そんなことよりも、この世界の守りの宮の恩人のことを知っておくほうが、もっと意義のあることです。

——はい。

乙姫 神代、ニギノミコトが天照大御神から授けられたヤタの鏡を戴いて地球に光臨されて以来、歴代のスメラミコトはこのご神鏡と同床共殿でお祭りしてこられました。ところが第十代の崇神天皇は、ご神威を畏れて皇女のトヨスキイリヒメの命に命じて、皇居の近くに天照大御神を移して祭らせました。次の垂仁天皇の御代、同じ皇女の倭姫命（ヤマトヒメノミコト）はさらに天照大御神の御杖代（ミツエシロ）となって、二十四ヶ国を八十余年もさすらわれた後、伊勢の五十鈴川のほとりに到ったとき、天照大御神は「この神風の伊勢の国は常世の浪のしき浪よする国、かた国のうまし国なり。この国に居らむとおもふ」と宣らせたまいて、ついにこの地にお鎮まりになり、以来の二千年を経たわけです。

——この倭姫命が神宮第一の恩人なんですね。

乙姫 大恩人であると同時に、偉大なる聖女でもあられました。

繆神宮最大の危機を救った慶光院の尼僧たち

——次の恩人は、どなたでしょう。

乙姫 慶光院上人です。室町時代の応仁の乱から始まった戦国の世は、伊勢神宮の二十年ごとの式年遷宮さえも百二十年間も中断させるにいたり、神官たちは為すすべを知らず、伊勢神宮は荒廃していききました。この神宮史上最大の危機に、慶光院という神宮の尼寺の尼僧たちが立ち上がったのです。とりわけ初代院主の守悦、三代清順、四代周養は、諸国を巡歴して神宮の危機を訴え、ご遷宮のための浄財の勧進につとめました。この尼僧上人たちの捨て身の赤誠が、当時の人々を感動させ、ついに式年遷宮は復興し、伊勢神宮は存亡の危機を乗り越えることができました。

——なんと偉大な尼僧たちですねえ。

乙姫 この神宮中興の恩人たちを讃えて、後年、遷宮上人、伊勢上人とお呼びするよう

になったのです。

——なるほど。女性ばかりですね（笑い）。

乙姫 なんていっても日本は神代以来、女ならではの夜の明けない国だからね。とりわけ伊勢神宮は、天照大御神という宇宙の生みの母をお祭り申し上げているのですから、なおさらです。もちろん内宮の荒木田家や外宮の度会家が、代々神宮をお守りしてこられ、教も作ってこられました。けれども教学なら、すでに天照大御神の御神勅にすべて言い尽くされているのです。

——あ、そうなんですか。

乙姫 天照大御神はこのヤタノ鏡を、私を見るつもりで祭りなさい、とニギノ命に仰せられた。その鏡が今も伊勢神宮に祭られていて、私たちが神宮にお参りするときは、このヤタノ鏡を拜んでいる。ということは、私たちは自分のなかにまします天照大御神を拜んでいるわけです。そしてためにいつも心を曇らさないように、穢っておきましよう。これこそが伊勢神宮参拝の極意なのです。

——ありがとうございます。来年の熊野那智と伊勢神島の集団初詣でが楽しみです。皆様もどうか良いお年をお迎えください！